

分子疫学 研究部

教授：浦島 充佳 疫学，統計学，国際保健

教育・研究概要

I. 研究内容

人は同じように見えても，ある人は病気になり，ある人は病気にならない。また同じ病名でも，病理組織像が同じでも，ある患者は治癒し，ある患者は不幸な転帰をたどる。これは，実験研究だけでは解明されないし，かといって個々の患者を診療しているだけでも氷解するものではない。そこで我々は分子生物学と疫学を融合させ，新しい臨床研究の分野を切り開くことにより，この点を解明していく。特に数年間ビタミンDとその受容体遺伝子多型解析，ゲノム研究を含めた病気の分子分類を研究室のメインテーマとする。

分子疫学はあくまで手法である。大学院生には個別にテーマを与え，分子疫学的手法を駆使して世界に発信できるエビデンスを構築してもらう。その過程で，仮説設定，研究デザイン，研究計画書，データモニター，統計ソフト(STATA)を用いての解析，英語論文作成を体験する。並行して，週に1回のラボミーティングにより疫学，生物統計学の基礎，プレゼンテーション能力，コミュニケーション能力，英語能力を養わせる。

II. 研究課題

1. 介入研究
 - 1) 食物アレルギー予防のためのランダム化臨床試験
 - 2) ビタミンDを用いた二重盲検ランダム化プラセボ比較臨床試験
 - (1) 肺癌患者を対象とした術後再発予防試験（ビタミンD受容体遺伝子解析含）
 - (2) 消化器癌患者を対象とした術後再発予防試験（ビタミンD受容体遺伝子解析含）
2. 観察研究
 - 1) DNAコピー数多型が糖尿病患者の腎合併症に及ぼす影響
 - 2) 神経疾患のCGHアレイ
 - 3) 双胎児研究
 - 4) 癌のCGHチップ研究
3. グローバルヘルス
 - 1) 新興感染症（新型インフルエンザなど）の数理モデル

- 2) 災害後のメンタルヘルス

III. 教育活動

1. バイオセキュリティ2014開催
2. グローバルヘルス
 - 1) 教養ゼミ（1年生）
 - 2) 選択実習（6年生）
 - 3) 春休み海外研修（1年生～5年生）

「点検・評価」

平成26年度は分子疫学研究室が発足して6年目の年であった。平成27年度の目標は，1. ビタミンDの臨床試験を推進する，2. コピー数多型をゲノム網羅的に探索し，疾病との関係を分子疫学的手法をもってあきらかにする，3. 食物アレルギー予防試験を推進する。

研究業績

I. 原著論文

- 1) Mafune A, Hama T, Suda T, Suzuki Y (International Univ of Health and Welfare), Ikegami M, Sakanashi C, Imai S, Nakashima A, Yokoo T, Wada K, Kojima H, Urashima M. Homozygous deletions of UGT2B17 modifies effects of smoking on TP53-mutations and relapse of head and neck carcinoma. *BMC Cancer* 2015; 15: 205.
- 2) Takahashi GI, Otori Y (Osaka National Hosp), Urashima M, Kuwayama Y (Fukushima Eye Clinic); for Quality of Life Improvement Committee. Evaluation of quality of life in Japanese glaucoma patients and its relationship with visual function. *J Glaucoma* 2015 Mar 30. [Epub ahead of print]
- 3) Kobayashi N, Murayama Y, Yuki I, Ishibashi T, Ebara M, Arakawa H, Irie K, Takao H, Kajiwara I, Nishimura K, Karagiozov K, Urashima M. Natural course of dissecting vertebrobasilar artery aneurysms without stroke. *AJNR Am J Neuroradiol* 2014; 35(7): 1371-5.
- 4) Okamoto A, Sehouli J¹⁾, Yanaihara N, Hirata Y, Braicu I¹⁾ (¹Charité Univ), Kim BG (Sungkyunkwan Univ), Takakura S, Saito M, Yanagida S, Takenaka M, Yamaguchi N, Morikawa A, Tanabe H, Yamada K, Yoshihara K²⁾, Enomoto T²⁾ (²Niigata Univ), Itamochi H³⁾, Kigawa J³⁾ (³Tottori Univ), Matsumura N⁴⁾, Konishi I⁴⁾ (⁴Kyoto Univ), Aida S⁵⁾, Aoki Y⁶⁾, Ishii N⁶⁾ (⁶Chugai Pharmaceutical), Ochiai K, Akiyama T⁵⁾ (⁵Univ of Tokyo), Urashima M. Somatic copy number alterations associated with Japanese or

endometriosis in ovarian clear cell adenocarcinoma. PLoS One 2015; 10(2): e0116977.

- 5) Hirata Y, Murai N, Yanaihara N, Saito M, Saito M, Urashima M, Murakami Y, Matsufuji S, Okamoto A. MicroRNA-21 is a candidate driver gene for 17q23-25 amplification in ovarian clear cell carcinoma. BMC Cancer 2014; 14: 799.
- 6) Urashima M, Mezawa H, Noya M, Camargo CA Jr (Harvard Medical School). Effects of vitamin D supplements on influenza A illness during the 2009 H1N1 pandemic: a randomized controlled trial. Food Funct 2014; 5(9): 2365-70.

臨床疫学研究部

教授：松島 雅人 疫学，臨床疫学，内科学，
総合診療医学，家庭医療学，
糖尿病学

教育・研究概要

臨床疫学研究部は，日常臨床で生ずるさまざまな疑問を疫学的手法にて解決する臨床疫学を軸として，研究，教育を行っている。

研究分野は，従来の疾病中心型の臨床研究のトピックにとらわれず，医療コミュニケーション，医療の質評価，行動科学，質的研究等が含まれている。さらに医療の最前線であるにもかかわらずエビデンスが不足しているプライマリケア，家庭医療学分野でのエビデンス生成を目指している。プライマリケアリサーチネットワークの構築は学外医療人との共同研究や研究支援によって達成されつつある。

卒前教育では妥当で効率的な医療を行える医師を養成する一環として Evidence-based Medicine 方法論教育を行っている。卒後教育は大学院教育として臨床研究の方法論および生物統計学手法の実践を中心とした教育活動を行っている。また文部科学省にて採択された平成 19 年度医療人 GP「プライマリケア現場の臨床研究者の育成」プログラムをシステムとして継続し，新たに「プライマリケアのための臨床研究者育成プログラム」を設立した。さらに平成 25 年度に採択された文部科学省「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の創案に携わり，その中で大学院授業細目として地域医療プライマリケア医学を開設し，地域医療を担っている医療人を対象に社会人大学院生を積極的に受け入れ，プライマリケアを担う若手医師を clinician-researcher として育成するとともに，地域での医療問題をテーマにした研究活動を行っている。

I. 研究課題

1. 多施設共同・在宅高齢者コホート構築と在宅死に関する研究：EMPOWER-JAPAN study (Elderly Mortality Patients Observed Within the Existing Residence)

在宅医療は，わが国において特徴的なシステムである。高齢化社会を迎えるにあたって在宅での終末期の重要性は叫ばれているにも関わらず，在宅高齢者の経過や予後は明らかでない。そこで本研究では，東京，神奈川，埼玉の 10 以上の教育診療所におけ